

イタリア労働運動の混迷

(1910年～1911年)

横 山 隆 作

I ま え が き

本稿は、本誌前号所載の拙稿¹⁾に引き続いて、1910年のアンドレア・コスタの死から、1911年10月のイタリア社会党第12回大会に至る時期のイタリア労働運動史を研究対象としている。この時期、ことに1911年9月のリビア戦争（イタリア・トルコ戦争）開戦前後には、イタリア労働運動にかかわるいくつかのかなり奇妙に感じられるトピックスが記録された。本稿はこれらのトピックスを綴りつつ、イタリアの一時代における労働運動の混迷の様相を示そうと試みたものである。

注

- 1) 拙稿「イタリア労働運動の分裂（1906～1908年）」、『淑徳大学研究紀要』第22号、1988年2月刊行、25～41頁。

II 1910年

1910年1月19日、イタリア社会党の長老コスタ（Andrea Costa）が故郷イーモラで58年の波瀾の生涯を終えた。コスタは1851年に生まれ、1874年にはバクーニン派の「インテルナツィオナリスト」として武装蜂起計画（ボローニャ事件）に参画し、その後「転向」して1881年にロマーニャ革命社会党を結成し、1882年にイタリア議会史上最初の社会主義者の下院議員となり、死の前年3月25日より第23議会の下院副議長を勤めていた。

1909年6月23日、第3次ジョリッティ内閣の時期に、下院の外務省予算審議において社会党のモルガリ（Oddino Morgari）が平和外交を主張する演説を行って、与党側から多大の野次が飛んだ時、たまたま議長を代行していたコスタは、モルガリ議員が思想を全て表明する権利を有することを保証し、さらに「私はまさに、ここで大いなる自由をもって発言がなさ

れうということが、イタリア議会にとっての栄光であろうと信じます」とコメントした。

コスタの葬儀には驚くほど多くの民衆が参集した。下院では1910年2月10日、社会党議員ベンティーニ（Genuzio Bentini）が追悼演説を行った。ベンティーニはその終わり近くに、コスタがボローニャ事件で投獄されてから下院副議長になるまで「30年が過ぎ去りました！我々はなんと遙かに歩んできたことか」と述べた²⁾。

1910年3月21日にソンニーノ首相が組閣後わずか3カ月余で総辞職を表明した後、1910年4月28日、ルツァッティ（Luigi Luzzatti）が首相となった。ルツァッティ首相は、立憲君主制自由主義「右派」の古参の政治家であったが、組閣にあたってはジョリッティ派から閣僚3名を入れ、また急進党と結んでサッキ（Ettore Sacchi）を公共事業大臣に、クレダロー（Luigi Credaro）を文部大臣に迎えた。そして初等教育制度改革、選挙制度改革、上院制度改革、社会政策、海運協定改訂等を政策課題とした³⁾。

急進党と連立したルツァッティ内閣に対してどのような態度をとるかという問題について、イタリア社会党は党内に一致した方針を作れなかった。4年前、1906年10月の社会党第9回大会（ローマ大会）では、「社会党議員団は政府の方針を支持する意味の投票はできない」という決議が採択されていた。しかし社会党改良派のトゥラーティ派（改良中間派）のトレヴェス（Claudio Treves）は、4月28日の党指導部および議員団集会において、新内閣が選挙制度改革すなわち普通選挙制度の実施に向かう限りで新内閣を信任するという条件付き信任の方針を出して、賛成多数を得た。党内左派のグラツィアデイなどは反対であった。

1910年4月30日、下院においてトゥラーティ（Filippo Turati）は、「この投票は外見上賛成（＝内閣信任）であるが、もっと棄権に相似しており、とても反対に近い」とか「だから我々の賛成（si）は反対（no）とほとんど同じである」とかのひどく苦しい文句を挿みながら、われわれはプロレタリアートのための大きな改革を目指すとして、内閣信任を表明した⁴⁾。この日ルツァッティ内閣は投票総数411中、信任386、不信任19、棄権6という多大な支持票を得た⁵⁾。

社会党のルツァッティ内閣信任に対して、トゥラーティの妻であり社会党の古参党员であり婦人解放運動のリーダーでもあるクリシヨフ（Anna Kuliscioff）は反対であった。クリシヨフが社会党のルツァッティ内閣支持に反対する理由のうちで最大のものは、ルツァッティ内閣の選挙制度改革方針には女性の参政権が全く考慮されていないということであり、社会党が漸進的に選挙権を拡張しようという路線で内閣を支持することは実質的に婦人参政権＝完全な普通選挙を棚上げすることであったからである⁶⁾。

ところで1909年から1910年にかけて、ローマニャ地方において、脱穀機紛争とよばれる事件が起こっていた。

1910年5月7日、エミリア・ローマニャ州ラヴェンナ県ヴォルターナにおいて、100人ほど

のブラッチャンテ（農業日雇労働者）の団が農作業中の小作農の集団を襲撃して負傷させ、その内の一名が死亡するという事件が発生した⁷⁾。これは脱穀機紛争中最悪の事件であったが、ここに至る経過はおおよそ以下のようであった。

1907年にローマ地方の小作農は蒸気動力式脱穀機の購入・使用を開始し、1908年にはラヴェンナ県だけでも動力脱穀機は22台を数え、その後も増加していった。当時この動力脱穀機1台の操作には運転手1名、機関手1名、脱穀作業係4名、補助労働者25ないし30名からなる一団の労働力が必要であった。そして彼らは運転手・機関手の労働組合と農業労働者の労働組合に組織されており、さらに労働組合は全国土地勤労者連合（Federterra）に加盟していた。この全国土地勤労者連合には小作農も地域ごとに組合をつくって加盟し、地主に対抗していた。

農業労働者と小作農の間では、はじめは脱穀機労働にかかわる賃金額が、次いで労働組合による脱穀機作業の労働力独占の問題をさらに越えて、脱穀機の運行全体が問題となった。労働者側が小作農の脱穀機の自家運行を認めず、すべての動力脱穀機作業を労働組合の管理下におこうと企図したからである。

1909年10月31日と11月1日にボローニャで全国土地勤労者連合全国評議会が開催され、脱穀機問題について3つの立場から決議案が提出され、討議された。一つは小作農の立場からのもので、脱穀機の所有と運行は小作農すなわち機械所有者の権利であるとするものであった。これと対立するのがラヴェンナの労働組合の立場からの決議案で、動力脱穀機の運行すなわち機械による脱穀作業は運転手・機関手・農業日雇労働者に全く任されるべきであるというものであった。さらにもう一つの中間的立場の決議案は、小作農も農業労働者も含めた脱穀機の所有と運行のための協同組合をつくろうというものであった。この第2の労働組合側の案は、全ての動力脱穀機作業を労働組合の管理下におき、作業人員数も労働組合が決定するので、農作業機械化による失業を防ぐことができるが、一方小作農には機械化による労務費低減のメリットがなく、さらに労働組合側は動力脱穀機の購入も計画していたから、小作農側としてはほとんど受け入れられないものであった。結局この会議は、文言を軟げてはいるものの、脱穀機は運転手・機関手・農業日雇労働者によって運行され、小作農等農民は彼ら労働者を雇用するという内容の、労働組合の立場からする決議案を採択した。

1909年11月7日、ラヴェンナの小作農5,000家族の組合は、脱穀機の所有・運行は小作農の権利であるとして、前述の決議を拒絶した。ローマ地方の他の多くの地域の小作農もこの拒絶に同調したが、一部の地域では、決議に従う者や、また小作農と農業労働者が合同して脱穀機労働協同組合を作る動きも見られた。

1910年3月、ラヴェンナの農業労働組合は前述の決議を拒絶した小作農の脱穀労働をボイコットした。ところがこの紛争にローマ地方の共和党が介入して、小作農を支持した。

そして小作農側は、ボイコットに対抗して労働力を確保するため、3月22日に新たなカメラ・デル・ラヴォーロ（労働会議所）の設立を呼びかけ、小作農主導の職業斡旋機関を作ろうとした。そこで1910年3月28日の全国土地勤労者連合全国評議会は、当該の小作農組合を除名した。

4月24日、新たなロマーニヤ地方のカメラ・デル・ラヴォーロの評議会委員が任命され、こうしてロマーニヤ地方には、全国土地勤労者連合傘下の農業労働組合を主力とする従来からのカメラと、ロマーニヤの共和党が支援する新カメラとが並存することになり、それぞれに加盟する農業日雇労働者の数は、しばらく後に従来からのカメラが約1万5千人、新カメラが約4千人を数えるに至った。この状況を見て、地主や農場経営者の団体であるロマーニヤ農業協会は、1910年春、従来からのカメラに所属する農業日雇労働者の日賃金を男子5.4リラ、女子1.9リラとし、新カメラに所属する農業日雇労働者の日賃金を男子6.5リラ、女子2.25リラとして、差別的に取り扱った。かくしてロマーニヤ地方の脱穀機紛争はますます深刻化し、1910年5月には前述の農業労働者による小作農襲撃事件が発生するのである。その後、小作農側は訴訟をおこし、裁判において小作農の選択権、すなわち小作農は農業機械の所有と賃賃の権利を有し、そして小作農は農業労働者の雇用や機械の使用について選択できるということが認められたが、その後もこの地方の紛争は続いた⁸⁾。

1910年10月21日から25日にかけて、ミラノにおいてイタリア社会党第11回大会が開催された。この時社会党は1,291支部、32,108人の党員を擁し、このうちの835支部、26,921名からの代表が集まった。この第11回ミラノ大会における論争は、主として党の多数派をなす改良派の諸派の間でたかかわされ、普通選挙制度、国会における諸党との連合および政権構想、「労働党」構想などの問題が焦点となった。

改良左派のモデリアーニ (Giuseppe Emanuele Modigliani) やサルヴェーミニ (Gaetano Salvemini) は普通選挙制度の完全実施を通じて党員数の停滞に悩む社会党の政治活動を活性化させることを主張した。ことにサルヴェーミニは、大会前の6月10日発行『ジョルナーレ・ディタリア (Giornale d'Italia)』誌上のインタビュー⁹⁾や大会における演説¹⁰⁾などで改良右派・中間派を猛烈に攻撃した。その論旨はおおよそ次の如くであった。

ジェノヴァやミラノやエミリア・ロマーニヤ州など北部イタリアの労働・生産協同組合や労働組合の多くは、19世紀末反動期には進歩勢力であったものが、今では特権的労働者集団となっている。これら北部の特権的労働者集団は未組織労働者や南部からの出稼ぎ労働者を排除・冷遇し、またブルジョア政権、地方行政、労働銀行と癒着し取引している。この特権集団は多くの改良右派の下院議員を国会に送っており、議員達は海運協定改訂のような北部イタリア（ことにジェノヴァ）に有利な政策をとるジョリッティおよびルツァッティ政権を支持し、保護貿易を要求している。（サルヴェーミニおよび南部の社会主義者・自由主義者

は概して自由貿易論者である。)改良右派の議員達は自分達を選挙で支持してくれる北部の特権的労働者集団や小ブルジョアとは直接に結びついているが、南部の大衆のことは理解しようとせず、地方的な、エゴイスティックな協同組合主義に陥って全般的＝階級的利益を無視しており、それゆえ普通選挙制度の実現に向かって努力しようとしなない。

一方、改良右派を代表する『アヴァンティ!』編集長ビッソラーティ (Leonida Bissolati Bergamaschi) は、社会党議員団 (ただし、非党員議員を含む) の自決とさきのルツァアッティ内閣支持の正しさを主張した。さらに社会党の組織原理についてビッソラーティは有名な「枯枝」発言を含む次のような演説を行った。

イタリア社会党は1895年に非合法下のパルマ大会 (第3回大会) において、労働組合や社会主義サークルなどの団体加盟制から、組織防衛のために個人加盟制へと変わった。「しかし、自由が勝ちとられた現在——大変異端の見解であることをお許しいただきたいが——、党は国民の政治生活における生存権を労働者階級に獲得するという党の役割の最大のものを達成しました。この日からかく形成されている社会党は、枯枝、あるいは枯れてゆくもの、そして新しい芽に代わるべきものとしての運命を必然的に持たねばならなかったのであります¹¹⁾。」ビッソラーティによれば、個人加盟制はプロレタリアートの意志の解釈を自分の事務とする少数の者の寄せ集めが党の生命を決することになるというのである。そして社会党のかたわらに労働総同盟が結成されており、権力の移譲が運命づけられていると述べ、結局、新しい大衆的な政党へと脱皮しなければならないと言うのであるが、新しい組織形態の具体的内容については言及しなかった。

組織論について1910年の春以来センセーショナルに取り上げられたのは「労働党 (partito del lavoro)」問題であり、ビッソラーティの議論の背後にもこれがあつた。「労働党」構想は、労働総同盟総書記リゴラ (Rinaldo Rigola) やジェノヴァの労働組合指導者ビエラーティ (Giovanni Battista Bielati) らがイギリスの労働代表委員会＝労働党を労働組合の議会活動のモデルとしたことから生まれた。イギリスの労働代表委員会は労働組合総評議会 (TUC) を基盤にして、しかし TUC からは独立した議会活動団体として1900年2月に結成され、1906年1月の総選挙で29議席を得て労働党と改称し、1910年には42議席を下院に占めていた¹²⁾。

リゴラやビエラーティの「労働党」構想は、労働組合というものは専ら労働者の直接的・物質的問題について心配するもので、このような労働組合固有の利益の獲得のための独自の議会活動組織、あるいは労働総同盟に唯一かつ直接に依拠する政治団体としての「労働党」を結成する必要がある、そしてこの「労働党」は社会党、共和党、急進黨、その他の民主勢力と協同して議会を変革してゆくというものであつた¹³⁾。

しかし「労働党」構想は改良右派以外の社会党内諸派からはなほだしく不評をかい、批判の火の手があがった。そこでリゴラ自身が社会党ミラノ大会において、「私は社会党に代わる

べき労働党の結成を望んでいると非難されております。それはバカげている！……労働党はすでに総同盟として存在しており、それがすべてであります¹⁴⁾。」と述べ、さらにビッソラーティの「枯枝」発言をも批判して、鎮火に努めた。この問題は翌1911年5月24～28日の労働総同盟第3回大会（パドヴァ大会）でも問題にされ、この大会に出席した革命的サンディカリスト系の鉄道員労働組合（SFI）のチャルディ（Livio Ciardi）は、労働総同盟は規約で諸政党の外にあらねばならないとされているのに、指導部は正真正銘の政党の創作を準備していると非難した¹⁵⁾。

ミラノ大会において非妥協革命派は自派の決議案をラッザーリ（Costantino Lazzari）が提出し、また同派最左翼のフォルリ支部代表ムッソリーニ（Benito Mussolini）が改良主義を激烈な口調で非難した。トゥラーティを中心とする改良中間派も決議案を提出し、改良右派と総同盟「労働党」グループを改良は革命を準備するものであるという観点から批判し、改良主義左派に対しては社会立法による改良の現実主義を主張した¹⁶⁾。

各派提出の決議案は採決の結果、改良中間派トゥラーティ案13,006票、改良左派モディリアーニ案4,547票、非妥協革命派ラッザーリ案5,928票、棄権932票となり、トゥラーティがヘゲモニーを握った。大会後『アヴァンティ！』編集長にはトゥラーティ派のトレヴェスがビッソラーティに替わって就任した¹⁷⁾。

1910年11月30日と12月1日にボローニャにおいて、10のカーメラ・デル・ラヴォーロと鉄道員労働組合などの革命的サンディカリスト系労働団体の第2回全国大会が開催された。この大会では、労働総同盟の内部から総同盟指導部を批判するという方針が採択され、また同時に協議機関としての直接行動委員会（Comitato dell'Azione Diretta）が作られた。その後労働総同盟が革命的サンディカリスト系のミラノとチェントのカーメラの総同盟加入を拒否したことを契機に、1912年11月23日から25日にモーデナで開催された直接行動委員会全国大会において、イタリア労働組合同盟（Unione Sindacale Italiana=U.S.I.）が結成されることになる¹⁸⁾。

ところで当時の革命的サンディカリストの指導者達は、社会党のようにはっきりした分派を作っているわけではないが、おおよそ3つのグループに分類される。その第一はラブリオーラ（Arturo Labriola）、レオーネ（Enrico Leone）、モッキ（Walter Mocchi）らの社会党員としての経歴の長い旧世代の人々で、彼らは選挙＝議会活動を肯定する。第二はデアムブリス（Alceste De Ambris）やコッリドーニ（Filippo Corridoni）などの直接行動委員会ないしサンディカリズム労働運動の主流である。第三はディナーレ（Ottavio Dinale）、ランツイッロ（Agostino Lanzillo）、マンティカ（Paolo Mantica）、オラーノ（Paolo Orano）、ロッシ（Cesare Rossi）、ロッソーニ（Edmondo Rossoni）、オリヴェッティ（Angelo Oliviero Olivetti）などの絶対的反議会主義を標榜するグループであり、この第三のグループのほとん

どと、他にビアンキ (Michele Bianchi) などがファシズムに流れ込んでゆく¹⁹⁾。オラーノは1910年10月16日に『狼 (La Lupa)』という雑誌を創刊したが、この発行協力者の中にナツィオナリスタ (nazionalista, 国家主義者または民族主義者) のコッラディーニ (Enrico Corradini) がいた。

1910年12月3日、フィレンツェでイタリア・ナツィオナリスタ協会 (Associazione Nazionalista Italiana) の結成大会が開催された。コッラディーニやフェデルゾーニ (Luigi Federzoni) が組織し、もと革命的サンディカリストのフォルジェス＝ダヴァンザーティ (Roberto Forges Davanzati) やマラヴィリア (Maurizio Maraviglia) が協力した。著名な革命的サンディカリストは——日程の都合であろうか——参加していないが、カロンチーニ (Alberto Caroncini) のような自由主義経済学者で『ジオルナーレ・デリ・エコノミスティ (Giornale degli Economisti)』誌の常連寄稿者であるような人物など、さまざまな潮流の人々が招かれて参加した。

この大会でコッラディーニは概略以下のような報告を行った。まず、現在のわが国の国民生活の状態は良くない、大切なことはナツィオナリスタ的転換の方法を見つけることであると述べた。次に、アルゼンチンやチュニジアにおけるイタリア移民労働者の苦しい状態について新聞記事を引いて説明し、移民が祖国から見捨てられており、また日本も資源に乏しく、多すぎる人口をもち、移民政策は移民の破滅によって成りたっているという意味でイタリアと同類であると述べた。国内に目を向ければ南部問題があるが、南部問題の少なくとも半分は移民問題であり、これすなわち海外の問題である。イタリアは文化的にも外国の奴隷になっている。「この原理の認識から出発しよう。プロレタリア諸階級が存在するようにプロレタリア諸国民 (nazioni proletarie) すなわちプロレタリア諸階級のようにその生活諸条件が他の諸国民よりも不利な条件を引き受けさせられている諸国民が存在する。すなわちナツィオナリズムはなによりもまず、イタリアは倫理的・物質的にプロレタリア国家であるというこの真実を固く把まなければならない。そしてそれは陣地奪回に進む時期の、すなわち編成前の時期の、目が見えず弱々しいプロレタリアである。」「よろしい、諸君、ナツィオナリズムはイタリア国民に対し (社会主義が闘争、団結、自覚、権利等々を教え導いたように) になにか同じことをしなければならない。まずい対比だが、我々の国民的社會主義であらねばならない。すなわち、社会主義がプロレタリアートに階級闘争の価値を教えたように、我々はイタリアに国際闘争の価値を教えねばならない。だが国際闘争とは戦争のことか？ そうだ、戦争でもある！ ナツィオリズモはイタリアに勝利の戦争の意味をよみがえらせるのだ。」といってもコッラディーニはただちに外国に対し戦争をおこせと煽動しているのではなく、「我々の勝利の戦争」とは「倫理的秩序」であり、「しなければならないという感情」とか「美德の実行」とかの「国民的規律の方法」「イタリア国民の諸階級間に家族の連帯の約束を新たにする最後の方法」のことであると言っている。そして現在の外交・内政政策の結果は悪いとし、

体制変革の必要があり、ナツィオナリズムはより良い人的・物的体制を見出すのだと述べた²⁰⁾。

注

- 2) Vara Modigliani, Gaetano Arfè, Vittoria Pugliese Silva (a cura di), *Attività parlamentare dei socialisti italiani*, vol.4°, 1909-1913, ESMOI, Roma, 1979, p.126, pp.208-210.なおコストの墓碑銘は Giovanni Pascoli による「愛の炎が燃える、我らがアンドレア・コストを呼ぶ時、我らが今でもアンドレア・コストを呼べば、燃える」というものである。コストのイーモラにおける議席を引き継いだのは、1873年イーモラ生まれの経済学者 Antonio Graziadei で、彼は1910年2月20日の補欠選挙によって下院議員に選出された。
- 3) ルツァッティ内閣期のイタリア政治史については次の論文を参照されたい。馬場康雄「イタリア議会政治における普通選挙権問題——第四次ジョリッティ内閣成立前史——」、『国家学会雑誌』第101巻5・6号、1988年5月、1～72頁。
- 4) *Attività parlamentare dei socialisti*……, op. cit., 272.
- 5) Francesco Brancato (a cura di), *Storia del parlamento italiano*, vol.XI, Flaccovio, Palermo, 1980, p.115. この投票における不信任は Napoleone Colajanni, Francesco Saverio Nitti の他共和党を主とし、また棄権の中には社会党の Alberto Calda, Giuseppe Pescetti, 他にカトリックの Filippo Meda がいる。
- 6) Anna Kuliscioff, Ancora del voto alle donne, “Critica Sociale”, 8, 16 aprile 1910, in Franco Livorsi, Filippo Turati — *Socialismo e riformismo nella storia d'Italia*, Feltrinelli, Milano, 1979, pp.193-200. Anna Kuliscioff, Carteggio a Turati, 18/5/1910, in Brunello Vigezzi, Giolitti e Turati — *un incontro mancato* —, tomo 1, Ricciardi, Milano, 1976, pp. 167-169.
- 7) *Attività*……, op.cit., p.288.
- 8) ロマーニャの脱穀機紛争について、資料は、イタリア農工商務省のロマーニャ地方農民階級関係研究資料 (1905-1910), in Sergio Zaninelli (a cura di), *Storia del movimento sindacale italiano*, I, *Le lotte nelle campagne 1880-1921*, Celuc, Milano, 1971, pp.391-484. 事件要約は Aldo Carera, *L'azione sindacale in Italia*, vol.1, La Scuola, Brescia, 1979, pp.116-118. 事件の歴史的評価については、Idomeneo Barbadoro, *Storia del sindacalismo italiano*, vol.1 *La Federterra*, Nuova Italia, Firenze, 1973, pp.291-303.
- 9) Gaetano Salvemini, *La nuova crisi del partito socialista*, in Franco De Filice (a cura di), *L'età giolittiana*, Loescher, Torino, 1980, pp.224-228.
- 10) Gaetano Salvemini, *Intervento al congresso di Milano*, in Franco Livorsi (a cura di), *Il socialismo italiano*, Paravia, Torino, 1981, pp.103-105.
- 11) ビッソラーティの大会演説は、Carlo Cartiglia (a cura di), *Il partito socialista italiano 1892-1962*, Loescher, Torino, 1978, pp. 132-134.
- 12) シドニー・ウェップ, ピアトリス・ウェップ, 飯田鼎・高橋洸訳『労働組合運動の歴史』下巻, 日本労働協会, 昭和48年, 797-801頁。
- 13) Giuseppe Mammarella, *Riformisti e rivoluzionari nel PSI 1900-1912*, Marsilio, Venezia, 1969, pp.265-268. および Cartiglia, *Il partito socialista*……, op. cit., 133-134.
- 14) Carlo Cartiglia, *Rinaldo Rigola e il sindacalismo riformista in Italia*, Feltrinelli, Milano, 1976, p.85.
- 15) Adolfo Pepe, *Storia della CGdL dalla fondazione alla guerra di Libia 1905-1911*, Laterza, Bari, 1972, pp.474-475.

- 16) Mammarella, Riformisti……, op. cit., pp.276-278.
- 17) Franco Livorsi, Turati, Rizzoli, Milano, 1984, p.187.
- 18) Gian Biagio Furiozzi, Il sindacalismo rivoluzionario italiano, Mursia, Milano, 1977, pp. 44-46.
- 19) Ibidem, p.96, 77.
- 20) Enrico Corradini, L'Italia, nazione proletaria, in De Felice, L'età giolittiana, op. cit., pp. 236-243.

III 1911年

1911年2月9日の『ジオルナーレ・ディタリア』に哲学者クローチェ（Benedetto Croce）のインタビュー記事が掲載された。（その後『ヴォーチェ〈Voce〉』2月9日、3月23日号に再掲。）この中でクローチェは、社会主義は冷たく死んだと語った。クローチェはさらに『ジオルナーレ・デリ・エコノミスティ』1911年3月号におよそ次のように補足説明している²¹⁾。

すべてのものが死ぬのであり、社会主義だけが死ぬことができないという特権あるいは不運を持っているのだろうか。社会主義が死んだというのは冗談でも逆説でもない。共同体とか財産の平等な分配の上に建つ理想社会のデザインは何度も姿を変えて出現したが、これらの普遍的なモチーフは規制すなわち平等という無邪気で子供じみた欲求である。しかし生命というものは不斉一で不規則なものであり、規制・平等という理念は生命と現実とに反する。またこれを空想的社会主義のことであると言うなら、空想的社会主義をしりぞけることは平等の理想をしりぞけることになるし、科学的社会主義の「科学」というのはメタファー（隠喩）なのだ。そもそも社会主義は今ごろになって死んだのではなく、70年前に死んでおり、マルクス自身が『共産党宣言』でそう言っている。マルクスが述べたことは予言であり夢である。近代の歴史上の社会主義は、反動に抗し、労働立法などの労働者階級の生活改善や社会的文化的諸分野に影響を与えたが、これは社会主義が近代文明に与えた贈り物であり、そしてこれは《市民》——あるいは単に《人々》——によってもたらされたものである。社会主義というのはもう労働者のことではない。

「社会主義の死」というセンセーショナルリズムに対して社会主義者は右から左までこぞって反発したが、「すべてのものが死ぬ」とか、社会主義的規制・平等は生命の不斉一と不規則というリアリティに根本的に背反しているといったクローチェの一種のモダニズムを問題とした批判はなかったようである。例えば、『アヴァンティ！』編集長トレヴェスの反駁は、クローチェの言っていることは、我（＝哲学者）思うが故に社会主義は存在し、我思わざるが故に存在しないといったことで、また、良識のある人なら、今ある社会主義は良くもなく英雄的でもなく、そして私は社会主義者ではないと言うだけですむことを、良識の不倶戴天の敵

である哲学者は「社会主義は死んだ」と言うのであり、これは保守系新聞の三文記者が長い間にわたって一週間に一度は書いていることだというのである²²⁾。

1911年3月18日、議会極左派3党がルツァッティ内閣と選挙法案審議委員会をつき上げた日、突然予想外にもジョリッティが、ルツァッティ内閣が提出した選挙制度改革法案よりも大巾な選挙権拡大を行ったほうがよいという意味の演説を行った。そのため議会の流れが一変して、ルツァッティ首相は3月20日に辞表を提出し、後任首相は4度ジョリッティとなった²³⁾。

ジョリッティ首相は3月22日、社会党改良右派の下院議員ビッソラーティを招いて入閣を要請し、3月23日には彼をクイリナーレ宮における国王との懇談に招待したが、ビッソラーティは入閣を辞退した。4月6日、第4次ジョリッティ内閣は選挙制度改革²⁴⁾と生命保険国有化²⁵⁾の政策を掲げて発足した。そして1911年4月8日、内閣信任投票に際しての演説の中でジョリッティは、ビッソラーティの入閣辞退を残念に思うこと、議会極左派もまた統治の責任をとっていること、8年前にトゥラーティに入閣を請うたことを述べた後、次のように言った。「8年間の過ぎ去り、国は前進し、社会党はその綱領を大そう穏健化いたしました。カルロ・マルクスは屋根裏部屋へ追いやられました。」信任投票の結果は、信任340票、不信任88票、棄権9票であり、社会党議員の大半は信任票を投じ、わずかにアニーニ (Gregorio Agnini) とムザッティ (Elia Musatti) が不信任、チッコッティ (Ettore Ciccotti) が棄権して、彼らは社会党議員団から脱退した²⁶⁾。

ジョリッティ首相の「屋根裏部屋のマルクス」発言は社会党の左派を大いに刺激し、1911年5月1日、ローマで、社会党非妥協革命派のレルダ (Giovanni Lerda、彼は名の知れたフリーメイソンである) とラッザーリによって、週刊誌『屋根裏部屋 (La Soffitta)』が創刊された。『屋根裏部屋』誌の発行協力者には、社会主義青年連合 (Federazione giovanile socialista) の書記で同連合の週刊機関誌『前衛 (L'Avanguardia)』編集長のヴェッラ (Arturo Vella) もいた。この社会主義青年連合は、文化活動やスポーツ活動も行う青年社会運動団体で、社会党や共和党など諸政党からは独立した組織であるが、社会党非妥協革命派の影響力が強かった。社会主義青年連合の加盟者数は、1907年の1,449名から、1908年に2,599名、1909年に3,362名、1910年9月のフィレンツェにおける大会の際には4,330名となっていた。『屋根裏部屋』や『前衛』にはムッソリーニがしばしば寄稿しており、彼は社会党改良派との決裂を主張し、また「力の弱いものは消滅する。つまり階級闘争とは力の問題である……、最後の闘いは暴力となろう……」などと書いていた²⁷⁾。

ジョリッティ首相がリビア戦争 (イタリア・トルコ戦争) 開戦にふみきった経緯は今日まで明らかではない²⁸⁾。北アフリカでは既にフランスがアルジェリアとチュニジアを、イギリスがエジプトを植民地としており、さらに1911年5月には、フランスがモロッコの反サルタン

反乱の鎮圧を援助するという名目でフェズを占領し、これに対抗してドイツがアガディールに軍艦を派遣した事件（第2次モロッコ事件）が起きた。イタリアはオスマン・トルコ領のリビア（トリポリタニアとキレナイカ）における自国の利権保持に不安を感じ、1911年7月28日に外相サン＝ジュリアーノ（Antonio San Giuliano）は数カ月以内に出兵が不可避となるであろうと首相に具申し、8月から9月に半ば公然と戦争準備がなされた。1911年9月24日、首相は国王に対トルコ宣戦の用意を報告し、9月26日にはトルコに最後通牒を送ると同時にイタリア軍のリビア上陸作戦を開始し、トルコが外交交渉を行おうとするのを無視して、1911年9月29日、イタリア王国憲法第5条にもとづく国王直轄の行為としてオスマン・トルコに対し宣戦を布告した。そのため国会は7月11日より夏期休会に入った後、1912年2月22日まで開かれなかった。

リビア戦争についてのイタリアの世論は、「トリポリ熱」といわれるほど戦争支持に傾いていた。ことに南部イタリアでは、リビアが「約束の地」であるかのような幻想が広まった。しかしリビア戦争に反対する人々もいないわけではなかった。ドナーティ（Giuseppe Donati）やミリオリ（Guido Miglioli）のようなカトリック系の民主派・労働運動家、エイナウディ（Luigi Einaudi）やジレッティ（Edoardo Giretti）などの自由主義経済学者はリビア戦争に反対した。しかしヴァティカンも宗教的中立という立場を示したものの、教皇ピウス10世はイスラム教徒との戦争であるということもあって、戦争支持だったといわれる²⁹⁾。

革命的サンディカリスト達は混乱していた。当時のサンディカリズム労働運動の中心にいたデアムプリス、コッリドーニ、ピアンキなどは反戦派であり、理論家のレオーネやマンティカ、ナポリの『プロパガンダ』紙に拠るファズーロ（Silvano Fasulo）、マルティーニ（Giacchino Martini、筆名 Sylva Viviani）、ファティカ（Michele Fatica）などもリビア戦争に反対した。

一方、ラブリオーラ、オリヴェッティ、オラーノなどはリビア戦争を愛国主義的に肯定した。アルトゥーロ・ラブリオーラはレオーネに次のように書きおくれた。「私には、トリポリタニア事件は……植民地を求めるものではなく、わが国のほとんど専ら地中海での生活と結びついた歴史的民族的欲求である³⁰⁾。」あるいはまた次のような文章を表した。「同志諸君、何故イタリアのプロレタリアートは革命に成功しないのか？ それはまさしく彼らが戦争にすら勝たないからだ。同志諸君は、ブルジョアジーがプロレタリアートを本気の戦いに慣れさせるままにしておいて、その後でプロレタリアートがブルジョアジーを打つことを覚えるのを見たまえ。同志諸君は、我々が我々の習慣である悪臭を放つ怠慢を粉碎するのをがまんしたまえ。今日、おそらくイタリアにおいて試みるべきことで、これより革命的な企図はないであろう³¹⁾。」

社会党議員団の中では、シチリアのカターニア選出で社会党籍を離脱しているデフェリー

チェ＝ジュッフリーダ（Giuseppe De Felice Giuffrida）とミラノ選出のポドレッカ（Guido Podorecca）が公然の戦争支持者であった。社会党統合派のフェッリ（Enrico Ferri）やモルガリは、戦争は革命とプロレタリアートの勝利を近づけると言って、リビア戦争を支持した³²⁾。

社会党や労働総同盟の指導部はリビア出兵の準備が歴然としてからもはっきりした反対運動をおこそうとせず、第IIインターからも不審がられるほどであった。わずかに、ミラノ大会後に社会党を離れたサルヴェーミニが『ヴォーチェ』紙上で9月にリビア戦争の企図に反対する論陣を張ったことと、全国各地の社会主義青年連合の支部が行った「赤い自転車隊」の戦争反対キャンペーンが存在したにすぎない。

1911年9月15日に社会党ミラノ支部が戦争反対ゼネストを決行せよという決議を行い、9月17日になって社会党指導部のトリポリ問題会議が行われ、9月24日には革命的サンディカリスト達が反戦ゼネストを決議し、また同日、ボローニャ、ローマ、フィレンツェなどで反戦デモが行われた。

1911年9月25日、社会党指導部、社会党議員団、労働総同盟の合同会議がボローニャで開催された。リビア戦争支持のデフェリーチェ＝ジュッフリーダとポドレッカは欠席した。リビア戦争反対ゼネストの問題について、改良左派のモディリアーニと改良中間派のプラムポリーニ（Camillo Prampolini）がゼネラルストライキに賛成した。しかしピッソラーティ、ボノミ（Ivanoe Bonomi）、ベレニーニ（Agostino Berenini）、カブリーニ（Angiolo Cabrini）、ゼルポリオ（Adolfo Zerboglio）、トレヴェスそしてトゥラーティらの改良右派と改良中間派の議員達がゼネストに反対した³³⁾。そこでまたもトゥラーティが左寄りの折衷案を出して、概略次のような決議を採択させた。

「社会党議員団は、経済的・財政的窮迫をもたらし、民主主義と社会改良のすべての効果ある政策の停止を示すところの、法的正当性からも国民の物的利益の観点からも正当化されないトリポリタニアにおける軍事作戦についての政府の歴然たる意図に対して、祖国と、なかならず労働者階級のより深くより真実な利益の名において、もっともエネルギーな抗議を表明する。……（議員団は）国民の議会の即時召集をその権利を有する人に要求する。そして同時に人民の示威を今日活気づけるところの抗議と憤りの感情に同意する。……組織労働者に対してゼネラルストライキを労働総同盟によって決定された最も厳格な規律の境界内および短い時間内に抑制するように呼びかける。その推進者の感情を無視して長引き超過するゼネストは、イタリアでは今日、トリポリへと我々の船を導くところの反動と軍国的風潮の強化以外の結果をもたらすことはできない。……」³⁴⁾

以上のような煽動的でない但し書つきの決議をうけて、労働総同盟は次のように決議した。
「労働総同盟は、24時間のゼネラルストライキを依持し、そして威厳を保ちすべての暴力行為

から遠ざかったスクラムを組んだ抗議の方法で行動することによって、今月27日の朝、労働の放棄を呼びかける³⁵⁾。」

このゼネスト決議についてビッソラーティは少し後（10月上旬）に、9月25日のボローニャ会議では議員団がストライキを決議したというのは真実ではない。議員団の大多数は、デモを越えないように労働者に呼びかけたのが実態で、ストライキに反対しており、24時間ストは議員団からは独自に労働総同盟が決定したものと述べた³⁶⁾。他方では、ムッソリーニが「手に時計をもって時間を計る抗議とはお笑いだ」と非妥協革命派の新聞紙上で言っていた³⁷⁾。

9月27日のゼネラルストライキは部分的にしか実施されなかった。ミラノ、ジェノヴァなどにおいてはかなりの数の労働者がストライキに参加し、トリノ、フィレンツェ、ボローニャ、ローマなどにおいてはデモと小規模なストライキが行われた。エミリア・ロマーニャ州では革命的サンディカリストの影響下にパルマやレッジョなどでストライキが実施され、またムッソリーニと共和党のネンニ（Pietro Nenni）が指導して騒乱状態をひきおこしたフォルリにおける2日間のゼネストが全国唯一の激発事件となった。

1911年10月15日から17日にかけてモーデナにおいて、イタリア社会党第12回大会が臨時に開催された。このモーデナ臨時大会の主要議題は、社会党の政権参加とジョリッティ内閣を支持するかどうかの問題とリビア戦争の問題であった³⁸⁾。

改良左派のブッシ（Armando Bussi）は、将来は政権参加が必要になるが、現在のところ議員団は対政府反対派に移行せねばならないと報告した。非妥協革命派のレルダの報告は当然リビア戦争を企てるブルジョアジーを非難し、政府との関係については、小さな改良や制限された譲歩をかちとることに傾く行動とは離別して、威厳をもって政府や与党の外にあることを主張した。レルダの主張に対して改良右派と改良中間派は反論した。

この大会でビッソラーティは、リビア戦争が大きな財政負担となり、それが労働者に負わされるであろうことを認めたが、同時にドイツがトリポリ沿岸を占領した場合にイタリアはより大きな戦争を避けることはできなくなると述べて、イタリアにとってリビア戦争は不可避免的なものであるという論理によって戦争を正当化しようとした。また彼は、リビア戦争抗議の理由で社会党がジョリッティ政府への反対派となるならば、普通選挙制度獲得が危うくなる。普通選挙はここ数年間の我々の努力の中心であったが、これと、他の方法によってもその悪影響を抑えられるところのトリポリ戦争への抗議とどちらを選ぶかと述べた。そして最後に、自分のクリリナーレ宮訪問（ジョリッティの入閣要請）について人々が全くの背信行為であるかのごとく言うことに、悲しむとともに抗弁した。

ビッソラーティとともに改良右派を代表するボノミの演説は、創立以来の社会党の基本方針から逸れる方向を目指すものであった。ボノミは既に1907年に、将来政権を単独で掌握す

るに十分な力を持つ政党は無くなるだろうとの見通しを公表しており、ミラノ大会後にも、たとえ男女の完全な普通選挙が行われたとしても、南部イタリアの状況を見れば社会党が政権政党になる見込は薄いと予測した。そしてこのモーデナ大会では、情勢は変化し、二大政党の政権交替という古典的な考え方は現実にあてはまらなくなり、複数政党の連立政権という考え方をすべきである。それ故、社会党は連立政権に参加しつつ、党綱領を部分的かつ漸進的に実現すべきであると主張した。この場合の連立政権とは、従来改良派の合意であった議会極左派3党およびその他の民主派との提携——これさえも非妥協派は反対していたのであるが——を指すものではなく、ジョリッティ派（立憲君主制自由主義与党）との連立を目指すものであった。さらにボノミは演説の中で次のように言った。「労働運動は、古いマルクス主義諸政党の閉ざされた空気を力強い息吹きで一新することによって、そして形式についての不動の権威を経験の多様性によって打ち壊すことによって、代議制政治における社会主義の民主主義への完全な適応と、経済における解放者のカストローフという神秘主義的待機を創造的な勤勉な仕事をもって取り替えることである改良主義的方法の完全な実施へと向かうのであります³⁹⁾。」

ボノミの主張に対して改良派のモディリアーニは、ボノミは社会党が階級闘争の党だということを忘却してしまったと批判した。非妥協革命派のボノミ非難は言うまでもなく、社会党は分裂の危機に直面した。分裂を避けようと努めるトゥラーティは、またまた和解的方向を目指した。トゥラーティは、トリポリ戦争に反対しないのは党の自殺だという自らの判断と、対政府関係については「ケース・バイ・ケース (caso per caso)」で決めるという1902年の党大会で決議された考え方を中心にして、およそ次のような内容の決議案を提出した。

最近10年間に社会党は議会において賛成も反対もしてきたが、それは完全に正しかった。社会党は、いつでも反対という政策をとることはできない。しかし社会党議員団が制度化された（一貫した）政府支持を行うというのは不合理である。また社会党が政府を支持してよい場合を予測したり成文化したりするのは不可能であり、議員団は「ケース・バイ・ケース」で行動するイニシアティブと責任を持っている。重大問題については党指導部と議員団の合意をもって、政府を支持するかどうかの態度を決定する。普通選挙制度の実現については、党は退けない立場にある。トリポリ侵攻について、プロレタリアートは断じて是認しない。当面、議員団は現内閣を投票によって制度的に（一貫して）支持するということはもはやすべきでなく、できないことである⁴⁰⁾。

このトゥラーティの決議案を含めて、この大会に提出された5つの決議案の第一回投票の得票数は次の通りである。レルダ（非妥協革命派）提出案8,646票、ペシエッティ（統合派）提出案1,073票、トゥラーティ、トレヴェス、ブッシ、リゴラ、ジボルディ（改良諸派合同）提出案7,818票、モディリアーニ（改良左派）提出案1,736票、バジレー（改良右派）提出案

1,954票。非妥協革命派の案が最も多い票を得たものの過半数を制することができず、第二回投票となり、改良左派と改良右派がトゥラーティ、トレヴェス案に合流し、結局トゥラーティ、トレヴェス案が採択された⁴¹⁾。

その後、リビア戦争がまだ続いていた1912年2月22日、下院が再開され、同日、リビアをイタリアに併合する1911年11月5日勅令の立法化審議・採決が行われ、出席433名中、併合賛成423、反対9、棄権1で可決された。このリビア併合法案の討議には470名の下院議員が出席しており、採決直前に37名が退場したが、この多くは社会党議員であった⁴²⁾。

1912年3月14日、パンテオンにおいてアナキストのダルバ(Antonio D'Alba)による国王ヴィットリオ・エマヌエーレIII世夫妻暗殺未遂事件がおこった。国会は国王夫妻を見舞う決議を行い与野党議員が王宮を訪れた。多くの社会党議員は王宮に行かなかったが、改良右派のビッソラーティ、ボノミ、カプリーニの3名が王宮を訪れた。この事件を契機に社会党は決定的な分裂に陥り、1912年7月7日から7月10日にかけてレッジョ・エミーリアで開催されたイタリア社会党第13回大会においては、多数派となった非妥協革命派がラッザーリ、ムッソリーニ、ボルディーガ(Amadeo Bordiga)などを先頭にしてヘゲモニーを握り、ビッソラーティ、ボノミ、カプリーニ、ポドレッカの4名を除名する決議案を可決した。除名された4名を中心に改良右派は社会党を離れて、7月10日ただちにイタリア改良主義社会党(Partito Socialista Reformista Italiano. 略称P.S.R.I.)を結成した。

リビア戦争は1912年7月から10月にかけてスイスのローザンヌとオーキーで開かれたイタリア・トルコ会談の結果、1912年10月18日に平和条約が締結されて終結した。この戦争でイタリア軍は9万人(1912年5月時点)を派遣し、戦死1,483名、戦病死1,948名、負傷4,220名を出した⁴³⁾。

ところでイタリア社会党第12回(モーデナ)大会が開かれたところ、1911年10月16日から10月27日の間に、トリノにおいてカルロ・アルベルト財団奨学生選考試験が行われた。この試験に合格すれば奨学金を得てトリノ大学に進学できる。受験生の中に2人の青年がいた。サルデーニャ島ギラルツァ出身のアントニオ・グラムシ(Antonio Gramsci) 20歳と、パルミーロ・トリアッティ(Palmiro Togliatti) 18歳であった。

注

21) Falea Di Calcedonia, La morte del socialismo (Discorrendo con Benedetto Croce), in Giornale degli economisti e rivista di statistica, vol.XLII N.3, Marzo, 1911, pp.294-300.

22) Claudio Treves, Uomini e pupazzi. La flanella del filosofo, Avanti!, 10 febbraio 1911, in Antonio Casali, Socialismo e internazionalismo nella storia d'Italia — Claudio Treves 1869-1933, Guida, Napoli, 1985, pp.191-192.

23) 馬場康雄, 前掲論文, 60-61頁。

24) 1882年選挙法によれば、21歳以上の男子で、読み書き能力がある者、または初等義務教育終了

- 者、または年19.8リラ以上の直接税を納める者が国政選挙の有権者であった。1912年選挙法(1912年5月25日法、1912年6月30日公布)は、旧法の有権者に加えて、21歳以上の男子で兵役を済ませたもの(読み書き能力・学歴や納税額の条件無し)、および30歳以上の男子のすべてを有権者とした。これによってほとんど男子普通選挙制に近い制度となった。なお選挙区は508区の小選挙区制、立候補者は200人以上300人未満の推薦人を要し、当選は総投票数(無効を除く)の2分の1以上で、かつ登録有権者数の10分の1以上の得票を要する。全有権者数は旧法下の約333万人から1912年法により約867万2千人へと増加した。馬場康雄, 前掲論文, 24頁。Giorgio Gandeloro, *Storia dell'Italia moderna*, vol.VII, 1896-1914, Feltrinelli, Milano, 1974, p.311.
- 25) 生命保険国有化法(1912年4月4日法)は1911年6月3日に Francesco Saverio Nitti(急進党系独立無所属, 第4次ジョリッティ内閣の農工商務大臣)によって上程された。生命保険会社は当時59社(その内27社が外国資本)あったが、政府は生命保険公社(Istituto Nazionale delle Assicurazioni)を設立し、これが大きな独自運営権をもちつつ、保険会社の持株会社となるものであった。この法案には既存の保険会社や銀行が反対しただけでなく、Antonio Salandraが自由主義経済擁護の立場から反対し、また De Viti De Marcoらの自由主義経済学者も国家独占反対を主張した。Candeloro, *Ibidem*, pp.308-310. Brancato, *Storia del parlamento*……, op. cit., pp.159-164.
- 26) Brancato, *Ibidem*, pp.157-158. Candeloro, *Ibidem*, p.330.
- 27) Mammarella, *Riformisti*……, op. cit., p.293.
- 28) 馬場康雄, 前掲論文, 4-5頁
- 29) Candeloro, *Storia*……, op. cit., pp.312-320.
- 30) Dora Marucco, Arturo Labriola e il sindacalismo rivoluzionario in Italia, Einandi, Torino, 1970, p.204.
- 31) Furiozzi, *Il sindacalismo*……, op. cit., p.46.
- 32) Mammarella, *Riformisti*……, op. cit., p.306.
- 33) *Ibidem*, p.311.
- 34) Cartiglia, *Il partito socialista*……, op. cit., pp.136-137.
- 35) Mammarella, *Riformisti*……, op. cit., p.311.
- 36) *Ibidem*, pp.311-312.
- 37) *Ibidem*, p.300.
- 38) 社会党モーデナ大会の概要は, Mammarella, *ibidem*, pp.315-328.
- 39) *Ibidem*, p.321.
- 40) Turati, discorso tenuto il 17 ottobre 1911 al Congresso di Modena, in Livorsi, Filippo Turati—*Socialismo e riformismo*……, op. cit., pp.222-224.
- 41) Mammarella, *Riformisti*……, op. cit., p.326.
- 42) Brancato, *Storia*……, op. cit., p.186.
- 43) Candeloro, *Storia*……, op. cit., p.329.

IV 結 語

社会的生産力の飛躍的上昇が大衆の生活の土台を揺り動かす時代には、希望と不安の継起に対応して、変化する外的事象をひたすら自己内に摂取しようとする強い焦燥が社会的な心理現象となる。客観情勢が変化したのだから自分も変化しなければならないのだというモチ

ィーフは、1910年から1911年の時期にイタリア労働運動にかかわって生じたいくつもの奇妙な言動——急速に変化する時代の心理の表現——における一般的な心理的モチーフであったと思われる。

確かに人間は常に変化し、時にその変化は加速される。しかし人間はこの形相の変化に対して仮に無相の不変性を立てて、心の安らぎを助けるのである。この仮に立てた無相の不変性の時代的表現が、自由・平等であり、助け合いの精神であり、団結・連帯の行動であり、諸々の労働運動の理想である。しかしこれさえも、疑われる時は疑われて、捨てられるのである。モダニズム（近代主義）はあらゆるものを疑って、孤独である。

20世紀最初の10年間が過ぎたころ、イタリアにおいても人々は新しい精神の表現を強く求めた。だが求めて即座に与えられるものではない。混迷はやむをえざる時代状況であるが、その中から「知の悲観主義・意志の楽観主義(グラムシ)」を以て、ただ忍耐する人も出現するのである。そうした人々の実在が希望の実在である。

Il confusionismo del movimento operaio italiano (1910-1911)

Ryûsaku YOKOYAMA

Questa nota oggettiva gli avvenimenti che hanno avuto luogo intorno al movimento operaio italiano dal 1910 al 1911.

Gli avvenimenti sono come una lista seguente.

- | | |
|---------------|--|
| Aprile 1910 | Il voto di fiducia per il ministero Luzzatti dal Partito Socialista Italiano. |
| 1910 | Le dispute delle macchine trebbiatrici in Romagna. |
| Ottobre 1910 | Il discorso di "un ramo secco" di Leonida Bissolati. |
| Dicembre 1910 | Il tema demagogico di "la nazione proletaria" di Enrico Corradini. |
| Gennaio 1911 | Il intervento per "la morte del socialismo" di Benedetto Croce. |
| Aprile 1911 | La parola parlamentare di "Carlo Marx è stato mandato in soffitta" di Giovanni Giolitti. |
| 1911 | L'appoggio alla Guerra di Libia di alcuni socialisti. |
| Ottobre 1911 | Il discorso per il rinnovamento dei vecchi partiti marxisti di Ivano Bonomi. |

Questi avvenimenti ci fanno una impressione della confusione.

《Anche noi dobbiamo trasformarci perché la situazione si è mutata》, il che è il motivo generale delle azioni curiose d'allora.

Nella società dove la produttività si sviluppa rapidamente, gli uomini manifestano forte i sentimenti che sollecitano una gran trasformazione.